



TITLE:

<大會抄録>元・明交代と太祖の皇帝権の位相：京師問題を例にして

AUTHOR(S):

細野, 浩二

CITATION:

細野, 浩二. <大會抄録>元・明交代と太祖の皇帝権の位相：京師問題を例にして. 東洋史研究 1977, 36(3): 484-485

ISSUE DATE:

1977-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153669>

RIGHT:

大會抄録

沈氏農書の富農經營像

足立啓二

戦後日本における明清時代史研究にとって、商品生産研究は、かつて、中心テーマの一つであった。しかしそれらの研究を通じて、直接生産者のもとの剰餘の實現、小經營の小ブルジョアの發展と分解は評價されてこなかった。

この從來の明清小經營論の形成にとって重要な根據となったのが、沈氏農書及び補農書であった。そこでは、沈氏農書に現われた經營體は、商品生産にまぎ込まれつつも、自給性の高い零細經營であり、それは富農的發展の可能性のない、解體しつつある手作り地主經營であると看做されてきた。雇傭勞働の性格も近代的なものとは認められなかった。

こうした理解が、明清時代の閉塞的小經營論を生み出した。社會構成の發展は、小經營の小ブルジョアの發展と分解に代って、「佃戸の自立化」、「地主佃戸對立の激化」に求められた。

しかし、沈氏農書に現われた經營體は、他人勞働を用いて、販賣のための購買を伴う高い水準の商品生産を営み、土地生産性と同時に勞働生産性の向上を追求し、利潤の擴大を目指す富農經營と考えるべきである。その經營規模も、田畑合わせて十數畝の零細なものとは考え難い。

沈氏農書の再評價を通じて、明清の小經營發展に關する從來の見解に對して、疑問を提したい。

元・明交替と太祖の皇帝權の位相

——京師問題を例にして——

細野浩二

明太祖（朱元璋）は、性格冷酷で「猜疑心」が強いとされ、その官僚・士大夫層に對する政治・思想統制行爲の説明に援用されるのが一般である。しかしそれは、太祖個人の性格というにはあまりにも重要な政治社會的意味を含んでいるように思われる。太祖の「猜疑心」の發想は、皇帝としての強權の發動という政治的行爲に他ならず、従って、そうした政治的行爲を性格論で説明する從來の議論には、太祖の皇帝權を固定視していたことの反證を見出すことができよう。太祖の強權發動が政治的行爲である以上、その「猜疑心」は政治權力構造の所産であるのに異ならず、とすれば、「猜疑心」を前提に据えて、逆に太祖の皇帝權の位相を再検討することが要請されなければならないのではないかと思われる。要するに、太祖に認められる「猜疑心」は、その皇帝權の位相を示す一定の徵標と看られるべきであらう。そして、太祖の皇帝權の在り様を規定する政治權力構造は、元・明交替期における朱元璋集團の構造にその生成因が求められ、検討を加えてみると、明朝の成立過程を理解するに當たって、從來、朱元璋の動向に注視し過ぎていたことが反省さ

れ、むしろ朱元璋は、江南地主層の利益代表として利用・擁立され、その指導の下に南京を京師にした王朝が成立せしめられたことが指摘されるように思われる。

唐宋變革期における吳越國の位置づけについて

佐 竹 靖 彦

從來の宋代社會經濟史研究は、史料制約もあり、具體的とはいわゆる先進地帯としての長江デルタ地帯の分析を主流としてきた。

一方唐代あるいはそれ以前の社會經濟史研究においては、華北のそれに重點がおかれている。これは隋唐以來の華北と長江流域の經濟的地位の逆轉を考えると當然のことといえるが、唐宋變革を全體として把握するためには、こうした地域的比重の逆轉そのものの歷史的過程とその意味を問う必要がある。

ここでは宋代にいわゆる先進的經濟地帯とされている兩浙地方が、そのような位置を獲得したのはいつごろであったか。又このような發展をふくみもつ兩浙地方の七世紀から十二世紀にかけての歷史過程は唐宋變革全體の中でどのように位置づけられるのかを問題としたい。

具體的には、この問題を、第一に、唐宋變革全體の中の吳越國の位置と構造——華北諸王朝とのかかわりの中での吳越國制・吳越の軍事體制の分析——から追求し、第二に、唐宋變革の中での兩浙地域の社會經濟の位置づけの問題を、宋代に入ってから同地域の

社會經濟構造に關する學說の成果をふまえて問題を溯及する形でとりあげたい。そして實證的には學田の問題を集中的にとりあげ、そこから、より一般的な中國近世の國家權力の基礎の問題にまで論及したい。

秦始皇の貨幣統一について

稻 葉 一 郎

秦始皇帝が初めて中國の貨幣を統一したという事實は、中國の歴史では常識中の常識になっている。この有名な事實は、周知のように、『史記』平準書および『漢書』食貨志(下)の記述に本づいているわけであるが、新中國の考古學的發掘の結果、秦半兩の出土は主として陝西・四川兩省に限られ、その他の地方では僅かに河南省の出土が傳えられるにとどまり、歴史記述と考古學的事實の矛盾が指摘されている。また半兩錢と戰國時代の貨幣とが併用されていたらしい事實なども指摘されている。

このような矛盾は、今日的流行の解釋、理念と現實、建前と本音、というような安易な解釋で解決できるものなのであろうか。

『史記』・『漢書』の歴史記述をもう一度再検討し、考古學的成果をも吟味しつつ、より合理的な歴史像を再構成して見たい。